

新 みどりの大使が行く!



2026
ミス日本
みどりの大使
永田 愛実

「第58回ミス日本コンテスト2026」が都内で開催され、13名のファイナリストから各賞の受賞者が決定しました。「2026ミス日本みどりの大使」は永田愛実さんです。

みどりの大使は、ミス日本各賞のひとつで、これからの1年間、森林の大切さや木の文化のすばらしさを伝え、みどりと木への親しみを広める役割を担います。

みなさん、はじめまして。

2026ミス日本みどりの大使に選出させていただきました、永田愛実です。長崎県長崎市出身で、現在は日本大学法学部の2年生です。みどりの大使に就任してから、森林や木材について学ぶ機会を多くいただき、これまで知らなかった世界に触れながら、新しい気づきの連続の日々を過ごしています。

長崎で生まれ育った私にとって、山や木はとても身近で、当たり前のご存在でした。小学校への通学路は公園や並木道を通る道



でしたし、友人と遊ぶ時も、祖父とカブトムシを捕りに行く時も、思い出のそばにはいつも木や森がありました。

幼い頃から父とよく山登りをしていました。地元から近い矢上普賢岳には小さい頃から登っています。

から登っており、今でも帰省すると父と一緒に登りに行きます。登山中に感じる土や木の匂い、木漏れ日の温かさ、頂上で食べる母の手作りのお弁当。自然の中で過ごす時間は、父との絆を深めると同時に、自身の心を整えてくれる大切な時間だと思っています。

高校時代は地元テレビ局の高校野球イメージガールを務め、炎天下の球場を走り回る球児たちの懸命な姿を間近で見ることが多くありました。自分の目で見て、肌で感じたことを、生放送を通して伝えた経験は、現在の私の信条でもある「現



場に立つこと」の大切さを教えてくれました。また、それと同時に平和活動にも力を入れました。活動の中で何度も訪れた山王神社の被爆クスノキは、原爆の被害を受けながらも再び芽を吹き、今も力強く葉を茂らせています。目の前に立ったとき、自然の生命力だけでなく、人の想いによって守られてきた命の重みを強く感じました。

さらに、父と島原普賢岳に登る中で噴火災害の歴史にも触れ、自然は恵みをもたらす一方で、時に厳しい表情を見せる存在でもあることを知りました。

この経験を通して、緑は決して当たり前だからこそあるものではなく、守り、育て、受け継ぐことで初めて未来につながる存在なのだと思うようになりました。

将来、私は芸能の道を志し、モデルや俳優として活動することを目指しています。



「ミス日本みどりの大使」とは

公益社団法人国土緑化推進機構ウェブサイト「みどりの大使」
(<https://www.green.or.jp/promotion/midorino-taishi/>)



まだ知らないことばかりではありますが、だからこそ感じられる発見や疑問を大切にしながら、森と人をつなぐ存在として、一歩ずつ学び、伝えていきたいと思っています。どうぞよろしく申し上げます。

 **1年間よろしく
お願いします！**



そして現場に足を運び、自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じたことを、自分の言葉と行動で責任を持って発信できる人になりたいと思っています。みどりの大使としてのこの1年間も、その姿勢を大切にしながら、一つ一つの現場に向き合っていきたいです。

愛実のつなぐ・届ける・森の声

毎月、このコーナーでは、「みどり」や「木」に携わる人々との交流の中で、大使の印象に残った言葉を紹介していきます。

2月12日、「モクコレ Wood Collection 2026」で、株式会社岸田の代表取締役・岸田真志さんにインタビューをさせていただきました。岸田さんからいただいたのは、「ひみ里山杉フィナンシェ」という洋菓子。

正直な第一声は、「え、木がお菓子里に!？」という驚きでした。ひみ里山杉が生地に練り込まれ、表面には粉末としても使用。ヒバオイルも生地に取り入れられたフィナンシェは、木を使っているとは思えないほど美味しく、ほんのりとしたやさしい香りが印象的でした。



岸田さんが話してくださった

「どんな木か、何の木かまでは知らなくても、日本人は本能的に、木は良いものだと感じている」

という言葉は、まさにその通りだと感じました。確かに私は「これはどんな木なんだろう」「なぜこの木は心地よく感じるのだろうか」と考えることはほとんどなかったと思います。でも木が良いものだと信頼しています。

衣・食・住のうち、木といえば「住」だと思われていますが、そうではなく「食」という分野から新しい挑戦をする岸田さんから、試行錯誤を重ねながら生み出そうとする情熱と工夫を感じました。